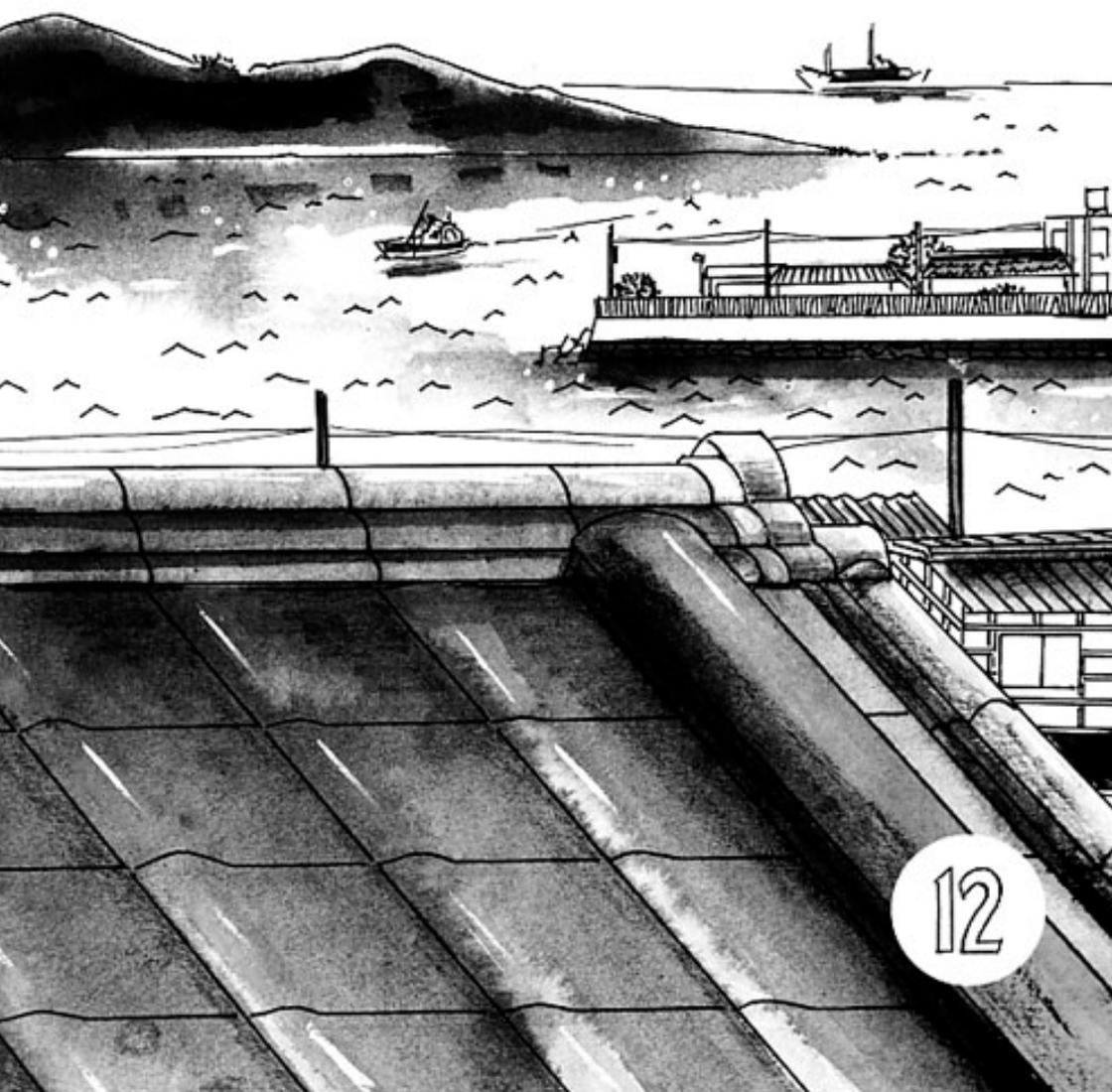


令和2年12月5日発行(毎月5日1回発行)
第60巻12月号(通巻737号)

風土



12

あまり寒く笑へば妻もわらふなり

(句集『含羞』より昭和二十二年作)

桂郎師は前年の二十一年に都心から疎開のため、鶴川村に引っ越してきます。「隙間風だらけの物置小屋同然の家で、親子四人の寝具すら満足になかった」と器師の第一句集『二代の螢』の序文に書いています。その暮らした二十二年になっても変わらず、暖を取る炭さえ無かったのです。一家の窮乏の極限状態のなかで、妻と顔を見合わせて泣き笑いするしかなかった。この苦しみを笑しに転化するところにやせ我慢の江戸っ子気質が垣間見られます。

食ひ物の中のなまあげ焼けば雪

(句集『含羞』より昭和二十三年作)

これも食べ物の句ですが、前回の「食ひ物の名は限りなしつゆの雨」の、桂郎師の好物の一つでしょう。生姜を搗り、醤油を用意し、これから「なまあげ」を焼くのです。もちろんコップに安酒も注いであります。おあつらえむきに雪がちらほら舞いだしました。熱々を頬張りつつ、雪見酒と洒落込むのです。

師の墓や十指をもつて落葉掻く

(句集『波の花』より平成十五年作)

桂郎師の墓は町田市の青柳寺にあります。街中ですが、木立に囲まれた静かな所です。この句の前に「日に進む二十九回桂郎忌」がありますから、お参りに来たのです。桂郎師の墓の近くには櫨の大樹があり、忌日の十一月六日の頃は落葉の季節です。墓の肩の落葉を「十指をもつて」はらうところに、桂郎師と直に話をしている器師を想像します。桂郎師を失ってからもう二十九年も経ってしまいました。

山ひとつあたたためてゐる冬すみれ

(句集『波の花』より平成十五年作)

この句は句集『波の花』の最後に置かれています。器師は「命二つ」の理念のもとに俳句世界を展開してきました、言い換えれば対象の命を輝かすために、その表現に執ってきたのです。「冬すみれ」という小さな命が、山全体をあたためているのです。なんと慈愛に満ちた世界でしょう。「命二つ」がそのまま具現化した白眉の作品と言えます。

安寿のこゑ

南うみを

丹後由良 四句

由良の門へ刈田の畦をたどりけり
松籟は安寿のこゑか由良の秋
人買ひの屋敷跡てふ葛あらし
秋風のはたてのこれが首塚と
稗抜くや稲穂の波におぼれつつ
よしよし風倒の稲起こしゆく
早稲刈るや鎌てらてらと日を返し
散らしては寄せては洗ふ貝割菜
夕風に媼をりとるをみなへし
秋天へとほくの鍬のまた上がる
磐座は日照雨をはねて冷ややかに
森の闇押しくるぬかご焼きにけり



竹間集

同人作品



白露

浅田光代

田の風の青きうねりや終戦忌
洞穴をあらはに松は色変へず
その墓の小さきをたたへ鱗雲
水甕に耳二つある白露かな
草の花死者は数もて計らるる
段々のこの段が好き赤とんぼ
まつすぐに風抜けてゆく竹の春

勢力図

橋添やよひ

秋草や古文書にみる勢力図
火の消えし闇去りがたき大文字
夢で逢ふ声なき夫や鉦叩
具沢山に疲れ厄日の豆腐汁
丹の国をふるさとに持ちいなびかり
杉の闇虫の闇もつ稲荷山
草の絮余生身軽くなりしかな

たわいなきこと

柿沼盟子

赤ペンに汚るる定規残暑なほ
灌木に鳴く蟬のゐて野分晴
踏みしめてがれ場下れば花芒
鉦叩日々に寄り来てけふ窓辺
夜の螳螂鉢の陰より踏み出づる
咲き満ちて夕日に萩の立ち上がり
栗を剥くたわいなきこと話しつつ

夜の秋

高村 令子

芒原歩かねば先見えて来ず
終戦日かの日のままに雲乾き
秋うららとんびときどき雲に乗る
とんびの輪少しづつ秋こぼしゆく
棲み慣れてまだ棲みたくて大根蒔く
木洩れ日になつてしまつた黒揚羽
繙きて膨らむ過去や夜の秋

月のテラス

林 いづみ

爽やかに蔵書リストに『百轉』を
秋うらら回転木馬に刻おしむ
金木犀滲みのびゆく本画仙
段畑の石のちぐはぐ秋茜
色も態もつぶさに孤なる唐辛子
身中の間合ひ豊かに鉦叩
黒猫と月のテラスに入れ替る

山粧ふ

土井三乙

手に掬ふ新米の仄かなぬくみ
病めば歩幅小さくなれり草の花
坂吹かれゆく秋蝶を紙片かと
萩の声里山に雲下りて来て
天網を零るるもあり鱗雲
灯台を越ゆれば牧場雁渡る
山粧ふ村に自慢の蕎麦処

浜庄屋

小林 共代

黄のカンナ海へ真直ぐ安房の里
浜庄屋縁に西瓜のころがれり
流木は昨日のままに盆の浜
桐一葉人の通らぬ漁師町
山門へ猫の就きくる土用東風
草の花歩幅小さくなりにつけり
流星へ手を伸ばしけり甲斐の里

草の絮

中根 美保

画家の名は画中の瓶に露けしや
剪るたびに空のひらけて葡萄狩
懇ろに叩きて稲架を組み了はる
藁塚ならぶ笠子地藏のかたちして
菩提寺を辞すや榎植を一つ賜び
蜘蛛の囲にあまた吹かれぬ草の絮
じやんけんを出す勢ひにばつたんこ

西行峠

間島あきら

蓮の実の跳んで身内の弾けけり
二の丸水路渡す木の橋水引草
すいつちよを袖に西行峠かな
いただきへ残り三丁すすき原
邯鄲のこゑたしかむる電子辞書
ひぐらしや水底に噴く砂の粒
鶏頭に触れて身内を燃え立たす

子規忌

内藤 静

西行に想ふひとあり月に雲
胡麻叩く筑波の風の来るまでに
秋めうが添へていきいき鯛茶漬
鉦叩たしかにふたつゐる夜風
盤石のあをあを濡るる子規忌かな
探す本ひよいと出てくる獺祭忌
糸瓜なほかの早世に寄り添へる

草の花

土井ゆう子

夕刊はけふ終刊に風は秋
湖よりの風に眼を閉づ涼新た
爽やかや連山に窓開け放ち
あるやうな無きやうな道草の花
瞑想の窓辺に寄れば小鳥来る
誰かれの消息聞かず秋の虹
風わづかありてよろしき吾亦紅

山河集

同人作品



南うみを選

草に沈みなほ鳴き続く秋の蟬

上村 葉子

鉦叩真間の手児奈の祠より
十六夜や唐墨の香の残る部屋
秋ともし褚遂良の書が好きで
鯛雲オープンカフェの白き椅子

鷗外も子規も横顔秋海棠

仙田 孝子

島へ発つ一機見届け秋の空
外階段闇を深くし鉦叩
ガラス器に活け迢空の葛の花
秋立ちぬ子規直筆の子規の句碑

話したき事には触れず雁渡し
届きさうで届かぬ思ひ秋の虹
大小の電池数ふる厄日かな

山森みちよ

咲き満ちて透ける空あり曼珠沙華
切株の影の静けさ鉦叩

瀬戸 薫

洗ふ手を休め墓石の文字なぞる
秋の雲鱗まみれの竜となる
録音の妣の声聞く夜長かな
破芭蕉風の迷ひを一身に

草田男

洗礼は死去の前日秋桜

松本 胡桃

色鳥や喜寿のステップ軽やかに
鉄釜も五十年なり栗おこは
高窓に月のぴたりとはまりけり
天高し誰でも弾けるピアノ鳴る
秋天へ飛んで行きそなトランポリン

油桐の実

橋添やよひ

鮒鮓の機嫌を訪ふも浦日和
草紅葉減りし浦里六十戸
舫ひ船ゆらして浦の霧襖
雁渡し湖北に残る丸子船
船運の菅浦松は色変へず
色なき風通し浦守る四足門
かな須賀神社かなや五七の桐の紋社
浦神へ素足詣でやつづれさせ

秋草に埋もれ舟型淳仁陵
古文書に献上とある油桐の実
国宝の「菅浦文書」おしいつく
浦絵図の乾きや遠く日雷
桐の実の落つるしじまに長居せり
供御人の裔の浦里草ひばり
秋うらら太公望に声を掛け
湖風や釣瓶落しの修験宿
丈賤ヶ岳の合戦ゆかりの黒山低き石仏群や秋桜
コスモスや改札のなき浦の駅
稲滓火の煙這ふ近江あとにせり
群がりて湖北へ畦の曼珠沙華

風土独語／南 うみを



鉦叩真間の手児奈の祠より

上村 葉子

「真間の手児奈」は現在の千葉県市川市の真間に伝わる悲運の美女のことで、万葉集に山部赤人の歌が残っています。その祠の間に鉦叩がいます。それは手児奈の声とも経とも聞こえます。

黒ぐろと御山洗の富士の丈

菅原 末野

「御山洗」は陰暦七月二十六日の富士山閉山前後に、富士北麓に降る雨のことで、この雨によって、多くの登山者よって汚された富士山が洗い浄められると伝えられています。霊峰富士山ならではの季節の言葉です。雨に現れた神々しいまでの富士が迫ってきます。

鷗外も子規も横顔秋海棠

仙田 孝子

この句を読んで虚を突かれました。二人とも横顔に強烈な個性があります。小説や短歌、俳句を近代化した明治人の面魂がここにあります。「臥して見る秋海棠の木末かな 子規」。

咲き満ちて透ける空あり曼珠沙華

山森みちよ

一見何でもないような世界ですが、そのアングルに特徴があり

ます。つまり、山口誓子の「つきぬけて天上の紺曼珠沙華」の句と同じアングルなのです。「曼珠沙華」の根元から見た世界で、人間の目線では「透ける空」は見えません。

秋七草憶良の歌碑に咲き添へり

森田 節子

この句は憶良の歌「萩の花尾花葛花撫子の花女郎花また藤袴朝顔の花」を踏まえ、歌碑に佇んでいるところです。作者の心は遠く万葉時代へ馳せ、その美意識を反芻するのです。

一段のひとつが高し実むらさき

雨宮 桂子

作者は石段の前で、乗り越えるべき「一段のひとつ」に躊躇しています。実はこの「一段」は心の中にあります。「実むらさき」の禁色の色が心を揺るがすのです。

洗礼は死去の前日秋桜

瀬戸 薫

この句には「草田男」の前書があります。草田男は俳句における思想性の発露に苦慮しました。その草田男が死の間際にキリストにたどり着いたのは何故か。「秋桜」は風に揺れるばかりです。

秋の夜や鷹女を魔女と読み違へ

小山 寿子

三橋鷹女は戦前に口語を駆使し、奔放に女性の情念を句にした才気煥発な俳人でした。早く生まれてしまった感があり、「魔女」と間違えたのには頷けます。

風土集



南うみを選

真つ先に秋を捉へて風見鶏 静岡 菅原 末野

黒ぐろと御山洗の富士の丈

豊穰の秋を見下ろすのつば杉

草の絮仔牛の耳標真新し

野外劇始まるまでの虫時雨

どじやう屋に胡坐の漢獺祭忌 千葉 上村 葉子

糠床に秋氣を足して掻き混ぜる

駆け抜ける白き牡馬や鬮雲

十六夜や珈琲シュガーひとつ半

一叢は地に触るるほど秋の風 川崎 森田 節子

戻れば紫深む吾亦紅

抽んでてなほ吹かれをる紫苑かな

草原を沈ませてをり霧しぐれ

秋七草憶良の歌碑に咲き添へり

秋燕や法話にあらむ子らの国 福生 雨宮 桂子

コスモスの幾千万の散華かな

秋声や浄土といふほどのあたり

一段のひとつが高し実むらさき

胡桃落つ父の音とも母かとも

秋水に長くのびたる鯉のひげ 川崎 小山 寿子

虫籠の声くぐもりて響きけり

秋の夜や鷹女を魔女と読み違へ

しやしやしやらと殺風景なねこじやし

音すれど忍者もどきや松手入

残り蚊の人の恋ひしき子規忌かな 東京 奥田 茶々

尖つておんぶばつたは草の色

化粧水染みこみやすき子規忌かな

雨まじる野分に堪へてお猪口傘

秋入日追うてバス行く出雲崎